歳時記のある暮らし

二〇二一年《五月》

初夏の風清らかな新緑の季節となりました。

皆様、おすこやかにお過ごしでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき誠にありがとうございます。

「五月の朝の新緑と薫風は私の生活を貴族にする」

萩原朔太郎の詩集『月に吠える』の中の『雲雀料理』の一節です。五月の空を見上げると、蒼穹の高みを目指して飛ぶ雲雀の声が聞こえたのでしょうか。「貴族」という言葉からは、礼儀正しく自立して何事にも動じないような人間の精神が思い浮かびます。新緑に風薫る五月の空気には、精神を貴族のようにするほどの清らかな力があるのかもしれません。

立春から数えて八十八日目の夜は八十八夜。今年は、五月一日が八十八夜にあたります。八十八夜は田植えや茶摘みなどを始める目安とされてきました。八十八夜に摘んだ茶葉は長寿の薬ともいわれたそうです。まろやかな旨味の新茶はこの時季の楽しみです。

五風十雨（ごふうじゅうう）という言葉がありますが、これは五日ごとに一度風が吹き、十日ごとに一度雨が降ることで作物が育つのに適した天候を表すとともに、世の中が平穏無事であることのたとえでもあります。生命の息吹が感じられる今、五風十雨の恵みを味わいたいものです。

代かきが行われた水田には苗が青々と育ちます。水田や水路にはメダカやカエル、ドジョウ、ゲンゴロウ、タガメ、ヤゴ、タニシなど多くの生物たちがやってきて、鳥も含めた生態系が築かれ、のどかな里山の田園風景ができます。

海ではアサリが産卵を前に丸々と太り美味しい旬を迎えるので潮干狩りが楽しめます。潮干狩りのタイミングは、月の引力に太陽の引力がプラスされて潮の満ち引きの差が最も大きくなる大潮のころです。地球の回転の中心、月、太陽が一直線になると潮位に干満の差が大きくなりたくさんの貝が採れます。日本では春と秋で、秋も干満の差は大きいのですが、潮が引く干潮が真夜中になるため、干潮が昼間になる初夏が潮干狩りには向いています。

五月といえば端午の節句。端午の節句の起源では屈原のエピソードが有名です。

（裏に続きます）

紀元前四〜三世紀の中国で、楚という国の国王の側近に屈原という政治家がいました。詩人でもあった彼は国民の信望を集めていましたが、陰謀によって失脚し国を追われ、故国の行く末に失望して川に身を投げてしまったのです。

楚の国民は大変悲しみ、川に行きちまきを投げて屈原を供養しました。ところが漢の時代、屈原の幽霊が現れ、「皆が供物を捧げてくれても、私に届く前に悪い龍に盗まれてしまう。今度からは龍が苦手な楝樹の葉で米を包み五色の糸で縛ってから川に投げ入れてほしい」と言いました。楝樹の葉については他に茅、笹などの説もあります。

こうして命日の五月五日に楝樹の葉で米を包み五色の糸で縛ったちまきを川に投げ入れて供養し国の安泰を祈願しました。これが更に病気や災厄を除ける宮中行事に発展し、やがて日本にも伝わりました。日本では、ちまきに結んだ赤・青・黄・白・黒の五色の糸は、子供が無事に育つようにとの魔よけの意味を込め鯉のぼりの吹流しの色となっています。

日本では急に暑くなるこの時期、病気にかかる人が多かったため「毒月」と呼び、漢方で健胃や鎮痛に効果を期待されている菖蒲やヨモギの葉を門に刺し厄除けや毒除けを行ってきました。奈良時代には五穀豊穣を願って「早乙女」と呼ばれる若い女子が田植えの前に菖蒲で身体を清める「さつき忌み」という風習がありました。

『続日本紀』には、聖武天皇が「今より以後菖蒲の縵を身につけないものは参内を許さない」と言った詔が記されています。宮中では菖蒲を髪飾りにした人々が武徳殿に集い、天皇から、菖蒲やヨモギなどの薬草を丸く固めた「薬玉」を賜りました。五月五日と菖蒲、これは聖武天皇以前から存在したようです。

端午の節句は中国から伝来した風習と合わさり、菖蒲を飾って厄を祓う行事へと発展したようです。現在ではグレゴリオ暦の五月五日に行われ、国民の祝日「こどもの日」になっています。

気温が上がり屋外での作業も快適なころ、アサガオの種やトマトやナス、キュウリなど夏野菜の苗の植えどきです。快適な季節ならではの暮らしを楽しみましょう。

皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社

おもてなし係お手紙担当　久郷 直子